

---

# それでも、キミと居たいから

春也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも、キミと居たいから

### 【Nコード】

N7233C

### 【作者名】

春也

### 【あらすじ】

少女のために彼氏を見つけようとする少年と、その相手にことごとく振られ続ける少女。本当の気持ちには、気付かない。

「…それで、別れたわけだ。」  
「…うん。」

夕方の教室。二人きりになったその場所で、俺は椅子の背もたれを前にするような格好で腰掛け、彼女と一つの机を挟むように向かい合って座っていた。彼女は落ち込んだ顔で俯いている。まあ無理もない、彼女はついさっき彼氏と別れてきたところなのだから。

「今回は付き合ってから何日もったんだ？」

「…一週間とちよつと。」

「また最短記録更新だな。」

俺は真顔で笑えない言葉を吐く。彼女はひどく小さく暗い声であっても俺の問いかけにはきちんと答えているものの、あいかわらず俯いたまま俺の方を見ようとはしない。

これでもう何度目だろうか。彼女が付き合ってきた男の人数は数知れない。だが一方で、彼女の恋愛はいつも驚くほど長続きしない。俺が知る限りではせいぜいもって一ヶ月程度、それもだいたいの場合まったくと言っていいほど進展しないうちに別れてしまう。別れ話を切り出すのはいつも相手の方から、別れる理由もほとんど毎回一緒に、

“おまえと一緒にいても付き合ってる気がしない。”

ということらしい。俺が彼女と知り合ってから的一年ほどの間に彼女はどれだけの男と付き合い、そして振られてきただろうか。

俺が彼女の恋愛事情に詳しいのには訳がある。なにしろ彼女と付

き合った男は全員、俺が彼女に紹介してきたのだから。

俺と彼女はどういう関係なのか、そう聞かれたらおそらく俺はうまく答えることができないだろう。ただ同じクラスになっただけの同級生ではないし、でも友人というのは少し違う気がする。…残念ながら恋人同士では絶対じゃない。しいて言うならば…、

“俺が彼女の新しい彼氏を見つけたし、振られたらまた別の男を紹介する”

ただ、それだけの関係。

高校に入学してすぐ、彼女に頼まれて中学からの先輩を紹介したことで始まった俺たちの関係。はじめのうちは彼女が俺に男友達を紹介してほしいと頼みに来ていたが、最近では彼女が振られたと分かる彼女に頼まれる前に俺の方から別の男を紹介するようになっていく。どちらにしても内気な彼女が自分から俺以外の男と話すことなど無理だろうから、俺が動いてやるしかないのだ。彼女がどうしてこうまでして常に彼氏を欲しがるのか、正直なところよくわかっていない。俺の見たところでは恋愛依存症、とでも言うのだろうか。どうも彼女は誰か男と付き合っていないければいられない性らしい。

この関係に最初こそ戸惑いはしたものの元々俺の交友関係はかなり広いものだったし、美人の部類に入る整った顔立ちをした彼女と付き合いながら男はいくらでもいたから紹介にまったく苦労はなかった。もちろん、人選にはある程度気を使っているけれど…間違ってもカラダ目当ての奴なんかを紹介したりはしないように注意している。

窓から入る日差しは次第に赤みがかかり、人々にさりげなく家路に

つく時を告げている。俺は普段居残りなんて絶対にしないのだが、彼女が彼氏と別れた日はいつもこのくらいの時間まで残って彼女の話し相手になっっている。授業が終わってからも学校に残るなんて面倒なことこの上ないと思っっていたが、これだけハイペースで別れられるとさすがに居残りにも馴染んでしまうようだ。

「なんで毎回愛想尽かされるのかは知らないけど…おまえさ、もうちょっと相手に好かれるような努力とかしたらどうなんだ？」

俺はいつも不思議でならなかった。少なくとも俺が見る限り、彼女がすぐに男に振られてしまうような人間だとは思えない。振った理由を男の方に聞いてみたこともあるが、いつも適当にあしらわれて核心には及ばない。どうして彼女はこうもことごとく振られてしまうのだろう。

「付き合ってるように思えないっていうのはおまえの気持ちの表し方とかの問題だろうしさ、おまえだって一人の人とずっと付き合えた方がいいだろ？せっかく付き合ってるんだからもっと相手のこと考えないと長続きしねえぞ。」

彼女はしばらく黙ってしまった。反省しているのか、それとも振られたショックが蘇ってきたのか、などと思っていたら

「あんたのせいよ。」

俺の耳に入らないように注意を払ったのであろう小さくて低い声が、確かな音となって俺の耳の中に入ってくる。こいつ、とうとう八つ当たりを始めたか。

「人のせいにするなよ。…確かに、おまえに相手を紹介してるのは

俺だけどな、付き合っただ後のことまで世話できねえよ。長く付き合いたいんだっいたら自分でそれなりに…」

「そういうことじゃない。」

「じゃあどうということだよ？」

「…知らない。」

彼女の声は前にもまして沈み、ついには俯いたままの彼女の瞳から涙が溢れ出てくる。泣き出してしまった。まずい、ちょっときつい言い方をし過ぎただろうか。

「お、おい泣くなって。傷つけたんなら悪かった。」

振られた後でも泣いたことのなかった彼女がどうしようもなく泣き続ける姿に、俺は動揺してしまった。

「今度はもっといい相手、見つけてやるからさ。」

こうして、俺達はいつもどおりの結末にたどり着く。俺が別の誰かを紹介することで話は終わる。

うまいこと利用されてるよな。俺は心の中でつぶやく。彼女が彼氏以外の男の中で俺とだけは普通に会話するのも、新しい彼氏を紹介してもらつという見返りがあるから。これが、俺たちの関係。二人がうまくやっていくために暗黙のうちに決められた、破られることのない微妙なポジション。

この関係を保とうとするとき、俺の胸はひどい痛みと情けなさに襲われる。

“俺と付き合ってくれ”

たったそれだけの言葉を、俺はどうして彼女に言えずにいるんだろう。少なくとも俺なら彼女を振ったりはしない。彼女をこれほど落ち込ませるようなことは、絶対にしない。

でも、俺がこの気持ちに気づいた頃にはすっかりできあがっていたこの関係を、俺はまだ変えることができずにいる。それはこの気持ちを彼女に伝えずとも、彼女の気持ちはわかりきっているから。

“男友達の紹介を頼むのは、あなたを恋愛対象として見ていないから。”

はじめから期待なんてしていない。これ以上悪くならなければそれで構わない。だから僕はまた彼女と他の男をくつつける。たとえばそれが自分の心を痛めつけるような行為であっても、彼女から異性としてみられていないとしても、いいように利用されているとしても…

それでも、キミと居たいから。

夕方の教室、俯いてことの顛末を話す私、私の話を黙って聞く彼。

この光景をもう何度経験しただろうか。もう二度と繰り返さない、とその度に誓うはずなのに、結局彼のところに戻ってきてしまう私はつくづく情けないと思う。

「…それで、別れたわけだ。」

「…うん。」

「今回は付き合ってから何日もったんだ？」

「…一週間とちょっと。」

「また最短記録更新だな。」

呆れたように彼が言う。彼は私の方を見ているのだろうけど、今私には彼の方を見ることなんかできなくて、自分の膝のあたりをずっと見つめている。

きつかけは高校一年の春、当時私が憧れていた先輩が、私と同じクラスのある男の子と仲がいいという話を聞いたことだった。男の子とまともに話したことのなかった私が、その先輩と仲良くなるために勇気を振り絞って話しかけた相手…それが、彼だった。

彼はいい人だった。私の話を聞いてまもなく、その先輩を紹介してくれた。その後私は先輩と付き合うことになったけれど、私が緊張のあまりまともに喋ることもできずにすぐ振られてしまった。

そんな時、落ち込む私を慰めてくれたのはやっぱり彼だった。

「おまえならきつと先輩よりいい相手を見つけれられるからさ、元気出せよ。俺も協力するから、おまえを幸せにしてくれるような人を探そうよ。」

この一言が出発点。それから私は彼に新しい彼氏を紹介してもらうようになった。彼の人付き合いの広さは私なんかとは比べものにならないほどで、私が紹介される男の人のタイプや年齢も様々だった。



た。

彼は相手を選ぶのにかなり気を使ってくれているらしく、彼の紹介してくれる人はみんな素敵な人ばかり。相変わらぬさかから別れてしまうことも多かったけれど、私も徐々に男の人との接し方に慣れていったので、本当に幸せになれるような相手と巡り逢えるんじゃないかと思えるようになってきていた。

けれど、最近は事情が変わってきている。

「なんで毎回愛想尽かされるのかは知らないけど…おまえさ、もうちょっと相手に好かれるような努力とかしたらどうなんだ？」

ほとんど聞いている一方だった彼が私に向かって言った。

「付き合ってるように思えないっていうのはおまえの気持ちの表し方とかの問題だろうしさ、おまえだって一人の人とずっと付き合えた方がいいだろ？せっかく付き合ってるんだからもっと相手のこと考えないと長続きしねえぞ。」

彼に核心を突かれ、私は答えにつまってしまう。数時間前、別れ話を切り出した彼氏に言われた言葉が頭の中で蘇ってきた。

“俺よりも好きな人がいるだろう？”

その言葉に反論はできなかった。事実だから。私が好きでもない人と付き合っているということは、もう相手に見透かされるようになっていた。それと、私が本当に好きなのは、机の向こうで私の別れ話に付き合ってくれているこの人だということも…。

「あんたのせいよ。」

彼に聞こえないような小さな声でつぶやく。私が何人と付き合っている何人に振られようと、いつでもそばにいてくれる彼。口ではきついことも言うけれど、私が振られるたびに精一杯私を元気づけようとしてくれる、優しい彼。私が彼のことを意識するようになっていくということは、ずいぶん前から気がついていていた。

そして私が次々に新しい彼氏と付き合うのは、そんな気持ちを一時でも忘れるため。

聞こえていないと思っていた私の言葉は、どうやら彼の耳に届いていたらしい。

「人のせいにすんな。：確かに、おまえに相手を紹介してるのは俺だけだな、付き合った後のことまで世話できねえよ。長く付き合いたいんだっいたら自分でそれなりに…」

：やっぱり、彼は気付かない。

「そういうことじゃない。」

「じゃあどういふことだよ？」

「：知らない。」

私だつてよく分かっている。彼が私に親切にしてくれるのは、間違っても恋愛感情からではないということくらい。彼にとって私はいつまでも目が離せない手のかかる友人、もっと言えば、妹分みたいなものでしかないだろう。直接聞かなくなつて答えは予想できる。

“おまえのことが好きだつたら、別の男なんか紹介するわけないだろっ?”

分かってる、分かってるけど…。

あなたはどうして私に優しいの？あなたはどうして私のために頑張ろうとするの？あなたは…私のことを見てはくれないの？

自分でも気がつかないうちに、私の頬を涙が伝う。一度流れた涙は、堰を切られたようにとめどなく落ち始める。

「お、おい泣くなつて。傷つけたんなら悪かった。」

相変わらず下を向いたままの私には彼の顔は見えないけど、声だけ聞いても彼が焦っているのが分かる。…たぶん私がどうして泣いたのかわからないんだろうな。

「今度はもっといい相手、見つけてやるからさ。」  
彼の言葉は結局いつもと同じ台詞で終わる。

そしてまた、私は同じ日を繰り返す。好きな人から別の男の人を紹介され、本当に好きな人への気持ちで押しつぶされないように好きでもない人と付き合うという日々。我ながら最低の行為だと思う。周りからは“軽い女”“男狂い”なんて言われ、私をいやな目で蔑む人もいる。

それでもこの関係は断ち切れない。私と彼を繋ぎとめているものが、たとえどんなに歪んだものであっても。周りから何を言われても、永遠に彼の好きな人になれなくても…

それでも、キミと居たいから。



(後書き)

はじめまして春也です。初投稿のヒヨッコ小説家ですが、皆さんに満足してもらえる作品を残していけるように頑張ります。ご意見・ご感想等、いただければ幸いです。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7233c/>

---

それでも、キミと居たいから

2010年11月10日10時53分発行